

5

明治女医の一側面——鬼才・油川太嘉

三崎 裕子

埼玉県所沢市

油川太嘉は明治女医の中でも特異な道歩んだ人物である。油川は1879(明治12)年、滋賀の水口藩士油川信近の娘として生まれた。17才で看護婦を志し上京し、北里柴三郎の土筆ヶ岡養生園、さらに慈恵病院を経て、1896(明治29)年に日本赤十字病院看護婦養成所に入学。その後、滋賀県赤十字支部の看護婦となり、20才の時、関西でのペスト禍に際して、大阪市立桃山病院首座看護婦として活躍した。そして22才でその経験をもとに看護の専門書『八種伝染病看護法』を出版した。同書の看護書としての意義については上坂良子氏の論文に詳しく、専門家向けの学術書、伝染病者看護の実践書であること、科学性、普遍性を有する看護書であることが指摘されている。同書は明治期の実践的な伝染病看護書として非常に重要な意味を有している。

油川は、こうして看護の実践と理論をまとめた後、その本の売り上げを、医学を学ぶ資金に充て、翌年から大阪慈恵医院附属医学校で学び、1902(明治35)年6月に医術開業前期試験に合格した。同校廃校後は関西医学院、さらに大阪府立病院夏期講習で実習を学んだが、この学校も廃校となったため、上京して日本医学校の臨床講習会で学び1906(明治39)年5月に医術開業後期試験に合格、同年7月に医籍登録された。

後期試験合格後、油川は見込まれて日本医学校の無給の助手、仮第二診察所主任に任じられた。そして1907(明治41)年に日本医学校の細菌学・衛生学講座開設準備のため、福士政一講師の補助という名目で、のちの日本医科大学教授長沢米蔵とともに東京帝国医科大学衛生学教室に内地留学し、その後日本医学校で顕微鏡実習の指導を担った。

発足当時の日本医学校の衛生学の教員は石原喜久太郎で、同校の最初の授業時間表によれば第四学年に毎週3時間の「細菌学・細菌検査実習」が課されていた。石原喜久太郎は当時の東大微生物学(細菌学)教授、緒方正規門下であったので、日本医学校の衛生学講座開設にあたり、油川らの実習が可能となったと推測される。

女医そして研究者として期待されていた油川太嘉であったが、1910(明治43)年、結核のため31才で死去した(拙著「明治女医の基礎資料」では没年を1911(明治44)年とするが、『朝日新聞』記事に従い訂正する)。

10代で看護婦となった油川は、22才で看護法の本を出版してその役目を全うし、27才で医師となった。油川は働きながら医師となる道を自ら開拓して行った。『日本女医会雑誌』で油川が「鬼才」とされるのは、医学に向かうその才能を賞してのことだろう。しかし苦学して医学を学んできた過程が、油川太嘉の身体を弱らせ、結核に罹患する結果となったことは、時代性とはいえ明治女医の歴史の中でも痛恨のことといえよう。

明治女医は1885(明治18)年の荻野吟子以降1912(明治45)年7月まで、医籍登録者は約240人に上る。医師となった彼女たちの何人かは、さらにその技術や知識の向上のため、大学での研究の道も模索し始める。受け入れられなかったもののベルリンに向かった高橋瑞、マールブルク大学で学位を得た宇良田タダと福井繁子などである。しかし国内の大学における女医の受け入れは容易なものではなかった。1897(明治30)年、ようやく東大小児科教室が女医の見学生を受け入れ、以後明治30年代に1名、明治40年代になると9名の女医が見学生となったことがわかっているが、実質的な研究者と認められるのは杉田玄白に連なる杉田津(鶴)のみであろう。東大整形外科教室では、女医に「介補」としての見学研修を認め、1905(明治38)年から1910(明治43)年まで、水江(北村)シヅが「介補」として学んだことが知られるが、開業後の研究生生活は知られていない。このような状況を見ると、短期間ではあるが油川太嘉の東大での研修と母校における実習指導は、明治女医の歴史の中でも非常に意味のあるものだったといえる。